

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 乙 第 号	論文提出者名	千葉 円
論文審査 委員氏名	主査 副査	嶋崎 義浩 有地 榮一郎 三谷 章雄	
論文題名	日本における早期幼児齲蝕に関連する 要因の検討		

インターネットの利用による公表用

(論文審査の要旨)

No.1.....

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

世界的に見ると、齲蝕はあらゆる疾患のなかで最も有病率の高い疾患である。日本では、他の先進国と同様に子どもの齲蝕は年々減少しているが、子どもの齲蝕有病率は年齢とともに上昇し、5歳児の約4割が処置歯を含む齲蝕を有している。そのため、幼児期の早期の齲蝕 (Early Childhood Caries : ECC) の発生を減らすために、ECC のリスクファクターを明らかにすることが重要であるという研究背景がある。

本研究は、2016年4月から2018年3月までの2年間に、愛知県内の政令指定都市と4つの中核市を除くすべての自治体で行われた1歳6か月児健康診査を受診した幼児61,741人(男児31,789人、女児29,952人)の横断的データに基づいて行われたものであり、大規模集団の疫学データを基にした研究からは、信頼性の高い結果が期待できる。

ECCの有無と齲蝕のリスクファクターとの関連はこれまでも数多く報告されているが、本研究は、1歳6か月児のECCの有無に関連する要因を、健診時に行われたアンケート調査から得られた数多くの質問項目について高度な多変量解析の手法を用いて検討している。その結果、口腔衛生状態、寝ながら母乳を飲む習慣、寝ながら哺乳瓶を飲む習慣、月齢、甘い飲み物の摂取習慣、間食の頻度、保護者の喫煙状況など、既知の齲蝕リスクファクターだけでなく、朝食摂取状況、就寝時間、子育ての相談相手の存在、予防接種の接種状況など、これまでにほとんど報告がない要因がECCのリスクインディケータとしてECCに関連していることを明らかにしている

点において新規性のある研究である。

これまでの ECC に関する研究の多くは、2 歳以上の子どもを対象としているものがほとんどである。一方、本研究は、1 歳 6 か月児健康診査の対象者である 2 歳未満の子どもを対象としており、この時期の幼児の ECC リスクを調べた研究は希少である。口腔細菌が定着する時期と言われている幼児期の生活習慣が、ECC にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしようとする研究は、子どもの口腔保健の向上にとって重要な意味を持つ。

朝食を毎日食べていない子どもや就寝時間が遅い子どもの ECC のオッズ比が有意に高かったことから、幼児期における不適切な生活習慣は、ECC のリスクを高めると考えられる。2 歳未満の幼児の生活習慣は、子ども自身の問題ではなく、子どもを養育している保護者に依存することから、子どもの生活習慣が乱れている場合は、子どもだけではなく保護者自身の生活習慣にも問題がある可能性がある。本研究は、健診結果をもとにした保護者に対する保健指導の現場において、子どもの生活習慣に対する指導だけではなく、保護者自身の健康意識を高められるような健康教育が必要であることを指摘しており、今後の保健指導の現場で活用できる内容を含んでいる。また、保護者の育児状況として、子育てに関する相談相手がいないと子どもの ECC のオッズ比が有意に高かったことを示している。主に子育てを担っているのは母親であることが多いが、保護者が子育てに関する相談ができる環境を整えることは、子どもの健康を守るうえで重要であり、子

どもの口腔の健康維持にも繋がると考えられる。地域の保健担当者による母親への子育て支援など、子育てを行う保護者を支える体制づくりが必要であることを示している点は、今後の母子保健施策にも貢献できる内容である。

本論文は、これまでの研究で示されてきた齲蝕に直接関連するリスクファクターだけでなく、朝食摂取や就寝時間などの生活習慣、また子育てする保護者の環境がECCの予防にとって重要であることを示している。勿論、従前から行われている間食指導や歯磨き指導も引き続き行う必要があるが、それに加えて、子どもや保護者の生活習慣及び子育て環境の確認を行い、必要な指導を行うことを勧めている点から、本研究は幼児の健康診査における保護者の保健指導の内容を見直すきっかけとなるものである。

本論文は、子どもの健康な成長発育を促すうえで重要となる口腔の健康維持にとって有益な情報を示しており、社会へ貢献できる意義深いものである。また本論文は、学術的にも興味深い内容を多く含むものであり、口腔衛生学のみならず関連諸学科に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士(歯学)の学位授与に値するものと判定した。